

〔研究論文〕

社会を知るもう一つのやり方 ——ドロシー・スミスに依拠して——

上谷 香陽

〔Article〕

An Alternative Way of Knowing the Social: Based on Dorothy Smith's Institutional Ethnography

Kayo UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to discuss the idea of the social organization of textual realities in Dorothy Smith's sociology.

Smith's sociology re-raised the classical sociological issue about the relationship between people's local and particular experience and extra-local and general social relations. And she suggested an alternative sociology that explored how the everyday world of people's experience is put together by social relations that extend beyond the everyday world. She argued that traditional sociological method of inquiry translated people's own knowledge of the world of their everyday practices into the objectified knowledge to make everyday world accountable within sociological discourse. On the other hand, her sociology locates the starting point of inquiry within people's actual experience and their own knowledge.

Based on Smith's Institutional Ethnography (IE), this paper investigates institutional accounting practices which produce textual realities. According to IE, actual work processes are made accountable as text (factual account) through institutional ideological procedures which attend selectively to work processes, thus making only selective aspect of them accountable within the institutional order. For IE texts are integral because they organize the trans or extra-local relations that we participate in but cannot observe from our local site of being.

This paper examines the way IE discovers and makes observable how texts enter into, organize, shape, and coordinate people's doings as we participate in the objectifying relation of ruling. In so doing this paper tries to suggest the method of knowing the social from people's actual everyday world.

1 はじめに

本稿では、ドロシー・スミスの社会学—— Institutional Ethnography ——における、テキスト的諸現実の社会的組織化という論点について考察する。スミスは、1970年代に「女性のための社会学 (sociology for women)」を提唱して以来一貫して、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係はい

かにして関わり合うのか、という社会学の古典的な問いを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直す社会学的探究を行ってきた(上谷 2017a,b, 2018)。スミスの社会学は、人々の生活(living)の毎日毎夜の局所的アクチュアリティ⁽¹⁾がいかにして、その外に拡張し、その内部では発見できない社会関係によって組織され決定されるのかを解明しようとするものである。

この社会学的探究は、実際に日常生活を生きる人々の経験の場所や、人々の生活の毎日毎夜の局所的アクチュアリティに立脚するが、いわゆる「ミクロ」「局所」「主観」「個別」「具体」に関心を持つ社会学を目指すものではない。むしろここでは、個人の経験の成り立ちにおいては、局所的で個別的な出来事と一般化された社会関係の関係は、二項対立的なものではないと考えられている。人々は、日常のお決まりのルーティンを遂行する中で、自分の生活や経験を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する拡張された社会関係に自覚的・無自覚的に参加している可能性がある。人々が、特定の時間や場所、特定の文脈に状況づけられながら、日々のお決まりのルーティンを遂行する中で知っていることや行っていることには、より大きな社会関係に接続する入り口が見出さうと考えられているのである。

スミスによれば、個人の経験と一般的な社会関係が関わり合うのは、具体的には、人々が何らかの institutional な場面、文脈、過程、ワーク⁽²⁾と接触する時である。ここで institution とは、多様な行政・経営・専門組織において生起する、今日の(先進資本主義)社会を組織化し、調整し、規制し、誘導し、統制する諸関係の複合体のことである。例えば、institution を英英辞典(Oxford Dictionary of English)で引くと、1. 宗教的、教育的、専門的、社会的目的のために設立された組織、2. 確立された法や実践、3. 何かを設立する(instituting)行為、とある。スミスの institution の使い方は、この英英辞典の用法に近い。つまり、第一義的には、北米社会における人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法や知識などに関わる諸組織や機関や施設などのことである。これら institutions は相互依存的に関連する複合体を成しており、実体的な組織としてのみならず、「客観化された知識(objectified knowledge)」を媒介に複数の人々の行為が連鎖し配置される諸関係の交差点や協働として捉えることができる⁽³⁾。

人々の個別具体的な毎日毎夜の生活で起こったことは、何らかの institutional な場面、文脈、過程、ワークと関わる過程で、一般的で抽象的な社会関係に接続されていく。ここで注目されるのは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果たすために不可欠な、テキスト——印刷されたものであれ電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する公的な文書——であり、テキストに媒介された客観化された言説的な知識である。個別的で具体的な個人々の経験は、文書(document)や事実報告(factual account)といった標準化され一般化され脱局所化されたテキストの形式にまとめ直され、institutional な過程を流通する。このテキストをもとに、教育や医療や行政や経営や法や知識などに関わる諸組織や諸機関や諸施設における一連の行為が配置(coordinate)され、人々の個別具体的な毎日毎夜の生活を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する何らかの決定が下される。この過程で何が起きているのかを、様々なやり方でそれに巻き込まれ、それに参加している人々の立ち位置から解明する社会学的探究がめざされるのである。

以下本稿では、まず、Institutional Ethnography が、なぜテキストの諸現実の社会的組織化に着目するのかを明らかにする。次に、スミスの論説に依拠しながら、生きられた経験とテキスト的諸現実の断絶が生み出されると同時に不可視にされるメカニズムについて考察する。最後に、学校と刑事司法における“性暴力”の扱われ方を論じた二つの社会学的探究を取り上げ、そこで提起されている問題は、institutional な過程における生きられた経験とテキスト的諸現実の断絶の組織化をめぐる

問題として捉え直すことができることを指摘する。

2 Institutional Ethnography の問題設定

Dorothy・E・Smith と Susan・M・Turner は、*Incorporating Texts into Institutional Ethnographies* (Smith & Turner 2014)の序章で、彼女らの提唱する Institutional Ethnography (以下 IE)の特徴として、行為の中のテキスト(text in action)の観察を、自らのエスノグラフィー的実践活動に導入してきたことをあげる。IEは、いかにしてテキストが時間や場所を横断した人々の活動を配置(coordinate)し調整(concert)するのかを探究する。直接観察可能なことを超えることは、エスノグラフィー的研究における調査の大きな刷新であり、重大な変化であるとスミスらは主張する。「人々の直接経験の内部に横たわるものを超える時、社会科学は、たいていの場合、理論や、アクチュアルな人々の世界にたち戻って投錨することができない抽象的なカテゴリーや概念の言語へ乗り換えることを押し付けられている。「権力」「大規模な組織」「過渡期的な関係」「ガバナンス」などの用語は、局所的なことを超える領域を作り、名づけることはでき、話すこともできるが、観察することはできないように、局所的なことを支配するのである。(Smith & Turner 2014:3)」

その代わりに、IEは、社会科学的探究におけるこの断絶を迂回するのだという。IEのエスノグラフィー的探究方法は、局所的場面の直接性を超えて私たちの生活を組織化する諸関係を解明し、その働きを探究し、学ぶやり方を発見してきた。テキストによって媒介された客観化する関係は、人々の局所的な日常の世界や生活を超越それらの反対側にあるが、日常の世界や生活の全体に行き渡り、中まで染み込んでそれらを組織するのである。IEは、異なる場所で、異なる時間に、異なる人々が読む、観る、聴くために繰り返し繰り返し現れうるというテキストの特徴に着目する。テキストが複製可能性であることは、あるテキストのあらゆるコピーと出現が、全く同じやり方で読まれるということの意味するわけではない。テキストを作ったり読んだり(観たり、聴いたり)することは、特定の時間や特定の場所で、アクチュアルな行為の連鎖においてなされる何事かである。しかし、テキストが、その活性化の一つの場所から別の場所に移動しても認識可能に同一であるということは、支配する諸関係を配置するテキストの弁別的な形式にとって不可欠のものである(Smith & Turner 2014:5)。それゆえこのことは、人々のワークの多様な場や場面を横断して拡張し、それらを配置し、規制する社会諸関係を探究する、エスノグラフィー的実践の開発にとっても重要なのである。

ここでスミスらが強調するのは、IEにとってテキストは、決してそれ自体において／それ自体のみで研究対象として扱われるべきではないし、いかに人々の行なっていることを配置するかということから切り離して扱われるべきではないということだ(Smith & Turner 2014:5)。テキストは、人々の毎日毎夜の生活(living)の限定された実際の場面において生起しているものとみなされなければならない。進行中の行為の連鎖——その連鎖がテキストと別の場所・別の時間で起きている行為を配置するのだが——にテキストが入り込み、そこにおいてテキストが役割を果たす時に、テキストはエスノグラフィーに組み入れられる。テキストは、人々がそれらを institutional な行為の連鎖の場所に出す時のみ、生き、活性化し、「生起する」ようになると IE は認識しているのである。

複雑で多様な社会諸関係を探究する IE は、人々が客観化する(objectfying)支配する関係に参加する時に、いかにしてテキストがかれら／私たちのやっていること(doings)に入り込み、それらを組織化し、形成し、配置する(coordinate)かを、ただ・まさに発見し観察可能にするのである。テク

ストを取り上げ、活性化し、作成することは、メッセージ——それらは物質的に基礎づけられ、実際の(actual)諸場面において実際の人々によって創り出されそして／あるいは活性化されなければならない——の世界の創出に入ることであり、そうした世界にとって不可欠なことだ。しかし同時に、これらのテキストは、単にここに位置づけられ、結びつけられているわけではないし、それは不可能である。そのような客観化され客観化する発話は、いつも作り手や読み手を諸関係の複合体に引っ掛け(hook)巻き込む。その際、発話すること読むこと視聴すること聞くことのある所与の瞬間は、他者がどこか別の場所で行なっているあるいは行うであろうことと、協働していく(coordinating)のである(Smith & Turner 2014:6)。

IEは、局所を超えそれに外在する諸関係——私たちはそれに参加しているが、局所的な場からはそれを観察することができない——の組織化にテキストがいかにか不可欠か、今日の社会における組織化や支配(ruling)の領域のエスノグラフィーにテキストが組み込まれる時に何が観察可能になりうるのかと問う。局所的場面で行われていることが脱局所的なものへ配置される中で、いかにして様々なテキストが作動されているのかを具体的に示すことによって、IEは、人々の日常に存在するがそれを超えている諸関係へつながるドアを開けると、スミスらは主張するのである。

3 テキスト的諸現実、支配、断絶の抑圧

この節では、Institutional Ethnographyの発想の基盤となるドロシー・スミス(Smith 1990a:83-104)⁽⁴⁾の論説に依拠しながら、生きられた経験とテキスト的諸現実の断絶が生み出されると同時に不可視にされるメカニズムとその問題点について考察する。

3-1 支配する諸関係としてのテキスト的諸現実

テキスト的諸現実とは、直接知られることを超えた世界についての今日の私たちの意識の基盤となっており、諸組織の内部や社会一般における異なるレベルの組織間の配置(coordinate)に不可欠になっている、とスミスは指摘する(Smith 1990a:83)。社会学者が読む表面において、あるいは人々がニュースを読んだり見たりする表面において、そのような諸現実とは、単に、かなたの世界について語っている有益なデータとして現れてくるかもしれない。しかし、それは誤解である。スミスによれば、局所的なアクチュアリティとテキストの表面の間には、支配(ruling)の社会的組織化の深さと複雑さが介在しているのである。このことは、テキスト的諸現実が、フィクションや偽りであるということではない。むしろ、それらは支配する諸関係や諸装置——国の行政的諸装置、経営・専門的諸組織、社会科学や他のアカデミックな言説、マスメディア、など——の普通の、不可欠な、実際、本質的な特徴であるとスミスは主張する。

事実の社会的組織化は、支配する諸関係にとって基礎的である。特徴的には、専門職の衣をまとった「一連の知識(bodies of knowledge)」としてであれ、「企業(corporations)」(ラテン語由来の語を経由して、これもまた身体(bodies)の隠喩が差し込まれている)としてであれ、政府「機関(agencies)」としてであれ、「一連の法」としてであれ、支配する諸関係は個人を超え外在するものとして組織される(Smith 1990a:84)。

企業や機関はそれらに雇われている人々をとおして行為するのであり、かれらの調整された行為は企業や機関の行為になる。言説的組織化に埋め込まれている客観化された一連の知識は、関連す

る言説のメンバーによって〈知られている〉。統制された訓練の過程をとおして、これらのメンバーは、テキストにおいて外在化された一連の知識を身につける。かれらは言説的組織化における「知る人」となる。テキスト的諸現実とは、これらの社会諸関係とその組織化の本質的な構成要素であるとスミスは捉えている。これらの社会的諸関係とその組織化は、特定の主観性から独立し、時間や場所や参加者の特定の視点や利害や意思に応じて変わることがない合理的に標準化された形式で現れてくる、客観化された知識の諸形式に依存している。テキスト的諸現実とは、共有され、同一で、視点のない対象と環境を構成する。こうした対象や環境は、それらを組織化するスキーマ、カテゴリー、概念を通して決定過程に関与するのである。

3-2 支配する諸関係によるテキスト的現実の媒介

社会学的言説は、体系的に開発された社会の意識を提供する他の社会科学的言説同様、典型的には、一連の管理する(governing)実践活動の中で国によって生成されたデータに依拠している。「私たちはこの情報を、それが表象する現実にややせつかに信頼を置きながら、私たちの言説のテキストに組み入れる。それは〈hard 否定できない〉データなのである(Smith 1991a:85)。

例えば、出生という現象が、「単なる」出生として、単に数えられるものとしての一つの出生として、現れうるのはいかにしてかとスミスは問う(Smith 1991a:86)。人口統計学者による文脈を取り去られたバージョンの、一つの「単なる出生」は、子供の母親や、父親や、親戚や友人たちの経験や実践活動における出生ではない。出生を単なる出生として構築することは、専門化され組織化された報告の実務の産物である。「Jessie Frank は1963年7月9日に生まれた」のような事実は、この点において最大限明白に見える。しかし、この事実はいかにして製造されたのかを考察すると、〈単なる〉記録としてのその特徴はさらなる institutional な過程の産物であることが明らかになる。

彼女の母親の陣痛と分娩という経験(それは簡単で喜ばしいものだった?辛く長く苦しいものだった?)、彼女の母親の陣痛と分娩の彼女の父親による経験(彼は立ち会って協力的だった?彼は排除されて心配して待っていた?そもそも彼はそこにいた?)——出生に関するこれらの生きられた過程としての経験は、とりわけ捨てられてしまう。それらは、institutional な過程においては関連性がないのである。記録する機関は、特定の個人の出生(ある実際の出来事)と、名前と、その個人を見つけ出すのに不可欠な何らかの社会的な座標(coordinates)——彼女の両親の名前、彼女がどこで生まれたか、など——の証明された永久のリンクを設定することにのみ関心があるのだ。国の登録機関の仕事である登録の公式の過程は、医療・病院組織に依拠している。法的な責任は、病院と医者に押し付けられている。法的な登録の目的にとって出生とは、何らかのやり方で——例えば、医師やその子供が生まれた病院の代表のサインによって——証明されなければならないのである(Smith 1991a:87)。

スタンプが押され、それが適切な機関(agency)の行為として保証されることによって、この用紙(form)は、この書かれた用紙と出生という実際の出来事と両親の配置(coordinate)の正しいつながりを確立する印を何らかのやり方で運ぶことになる。これは、個人の市民アイデンティティが人生で初めて文書化される瞬間である。書かれた用紙とアクチュアリティの間のこの保証された関係は、出生の証明を、他の官僚的諸機関のための知識として信頼できるものにする。例えば、学校教育の目的のために子どもの年齢が証明されなければならない時や、パスポートなどの二次的身分証明が必要な時や、多様な法的目的のために、である。そして、出生を単なる出生として構成するその同じ機関が、政府の統計を収集する目的のためにそれを数えるのだ。

スミスは、その報告の手続きが、病院や医療の専門職のルーティンの実務(practices)によってさらに媒介されていることに注目する(Smith 1990a:87)。産科の実務、陣痛・分娩室の組織化、病棟、看護の実務、など、これら全ては、場面と、偶有性と、公式の登録官によって自明視され使用される行政的手続きを規定する。病院の手続きは(この)赤ん坊が(これらの)親たちの子供であることを提供し、保証しなければならない。将来の母親は、病院に入った時に身分証明のラベルを与えられる。病院にとってそれぞれの出生は違っていても、それは標準化された記録付けのルーティンに応答するのである。このことは、出生の組織化にとっては不可欠のことである。したがって病院や医療の実務は、出生証明や人口統計学者の算出の概念的構造を予期し、それを用意する。かれらのルーティンの実務もまた、出生を、単なる出生として構成するのである。

それら「単なる出生」とは対照的な、子供の母親や父親にとっての「出生を生きること」を想像することができる。かれらにとって、出生は、深遠な身体的感情的経験である。生きられている出生は、人口統計学者による文脈を取り去られた諸カテゴリーをもたらさない。出生の感情それ自体が、単に直接的な出来事と結びつけられているだけでなく、過去に作り上げられ未来に続く諸関係とも結びつけられている。親たちにとっては、出生は、その瞬間には完全に完成しない何かの始まりである。かれらの子供の出生は、かれらの生活の全文脈から概念的に切り離されうる単一の出来事なのではないのである(Smith 1990a:88)。

対照的に、病院や医療の実務の行政的、技術的組織化は、ある出生を、多くの同様のエピソードの一つのルーティン・ワークにおける、単一のエピソードとして構成する。出生を証明することは、官僚的過程——その中に文脈と切り離された医学的出来事が埋め込まれているのだが——のルーティンである。それは、医者と看護師と行政職員が関わっている、病院の毎日/毎夜のワークである。このようにして、人口統計学者の読みの「単なる出生(birthness)」は、テキストに媒介された権力の組織化の複合体によって媒介されているのである。

これらの媒介する支配する諸関係が、社会学者を、人々——かれらの生活からその[出生という]事実が生み出された——の経験された諸世界と一定の関係に置く。社会学者と、人口統計学的事実がその代用を務めたももとの生きられたアクチュアリティの間には、局所的な出来事の報告を国の情報収集のシステムと等位に調整する(coordinate)、法的に押し付けられた実践活動の複合体が横たわっているのだ(Smith 1990a:88)。人口統計学的データはわかりやすい。支配する諸関係の中にそれらのデータの前段階が隠れて存在していることの意義は、そのようなテキスト的諸現実にとっては重大ではないように見えるかもしれない。にも関わらず、社会学者はこれらの媒介する過程を、いかにしてそれらがデータの特性と構造を生成するのか、いかにしてそれらが政府の政策やイデオロギーを表現しているのかを把握しなければならないと、スミスは主張するのである。

3-3 「ケース・ワーク」のためのケースとケース・ヒストリー

テキスト的諸現実とは、読み手と「実際に起こったこと/存在するところのもの」の間に特別な関係を創る。この関係は、単に言葉や文法の選択によって組織化されるのではない。テキストに組み入れられている支配する諸関係の特性は、その中で構成される諸現実に対する読み手の関係に入り、これを決定するのである(Smith 1990a:89)。

スミスによれば、支配することの弁別的な組織化は、特定のテキスト的形式、すなわちケース・ヒストリー^⑤やケース・レコードに差し込まれる。人々を処理することに関わる諸組織において、それらの対象になる諸個人に焦点が合わせられたワーク過程を配置していく特徴的な形式がある。

福祉や精神医学の文脈において、組織的要素としての〈ケース〉は、諸個人とかれらの記録の間の持続する(局所的に達成される)諸関係として存在する。institutional な過程において、諸個人は、かれらの記録の解釈的管理の下で、〈ケース〉として知られる。何らかの決定が下される時には、かれらの現在の状態が、ケースに入っているかれらの過去の文書軌跡に見出されるのである。

ケース・ヒストリーとケース・レコードは、典型的には以下のような組織の形式に埋め込まれており、そうした形式に不可欠である。すなわち、処理されるべき人々との直接的な日々の接触は最前線で行われ、必然的に従属関係に置かれる。他方、それらの人々についての決断は、進行中の直接的な接触を欠いた、指定された責任のある地位にいる人物によってなされる。そのような組織である(Smith 1990a:89)。19世紀以降発展してきたケース・ヒストリーやケース・レコードは、専門家の専門的言説が確立されるにつれ、専門的行政の実務であると同時に、専門的言説の基礎となる知識の一部となった。それらを書くための方法的手続きが開発され、記録が標準化されたやり方——個人ごと、病院ごと、クリニックごとの特異性としてではなく——で集められることを確かにした。観察や探究の標準化された方法、カテゴリー、解釈枠組や実践活動などが、関連された専門的諸言説において発展していったのである。

ケース・ヒストリーの対象である人々は、通常、特徴的に権威を剥奪されている(Smith 1990a:91)。北米の女性運動以来、精神医学による女性の抑圧をフェミニストの立場から探究してきたスミスは、たとえば、精神医学の場面では、兆候となる表現以外は、患者の声は際立って排他的だったと指摘する。病院の外や病院での日々のルーティンにおける患者の生活の直接の知識を最も持っている人々は、病院という組織の中で話す権利や聞かれる権利を最も持っていない人々でもある。精神医学の分業が、このことを強化してきたとスミスは言う。

以下の引用が示すように、患者自身は、問診の用語を定義する権威を剥奪されている。

精神分析医は、どのくらい私が感じたようなやり方で感じできたかを尋ねることから始めた。このことは私を困らせた。私はずっと前から私が感じたようにしょっちゅう感じていた。私は自分がなぜここにいるのか、何を言ったら良いのかわからなかった。私は彼女に、自分が父や義理の母のことをどう感じるかを話したくはなかった。他に言うことがなかった。そして彼女は、私の問題はとても深いので、なんらかの真剣なセラピーが必要だと言った。かれらは言った「休息のために入院したら。」と。(Smith:1990a:91) (6)

患者が自分の経験を話すことを許される場所では、彼女の言明は、情報としてではなく彼女の悪いところの指標として扱われた。彼女は資源であり、自分の行動を説明する主体(agent)ではないのだ。報告書は彼女が言うことを使うかもしれないが、それらの作成の中で彼女は何も言わない。

一度私が病院に入れば、外に出たいと言うことは無意味だ。かれらは私が家に帰りたと言ったことを減点するだけだ。それは私に対する罰点になるのだ。私は薬を飲むのを拒んだ。そしてこれも罰点になる。(Smith:1990a:91) (7)

スミスが着目したのは、このような精神医学のワークの対象たちの生きられた経験と、テキストの現実の秩序の内部で彼女たちの表象を産出する社会的組織化との間に存在する、深い断絶である。精神病と定義されるようになる、個人に起こったことは何であれ、そもそもは、彼女が生きているところで、彼女の経験の具体的でアクチュアルな条件において、他者たち——医療場面におけるトークの諸関係に限定された人々としてではなく、生きられた人々としての他者である——との

諸関係において起きたはずである。この文脈には、他者たちもいるはずであり、その他者たちの世界と経験は、かれらと共にいる彼女の世界と経験と交わっているはずである。しかしながら、精神医学のケアの組織化は、個人を、(他者たちもまた行為している状況の部分としての)彼女の行為が生起する文脈から分離する役目を果たす。彼女はそうした文脈から、治療のために(拘置のためではないとしても)連れ出され、彼女の生きているアクチュアリティや特定の文脈を、漸次、彼女から一掃し、切り離す過程へ連れて行かれるのである (Smith 1990a:92)。

(彼女)は、自分の状況と諸関係から連れ出される。そして、(かれら)が背後に残る。彼女は機関によって充当された・盗用された文脈に位置づけられる。その場面は、彼女には関わり合いがない。そこにあるものは何も、彼女には関わり合いがない。彼女は(かれらの)仕事なのだ。この組織化は、彼女がここですることはこの組織化にとっては重大ではなく、生産的でも意味あるものでもなく、一つの企てとしてのこの組織化には貢献しない、ということを実際にするように設定される。彼女はこの組織化のワークの対象として——それへの参加者としてではなく——構成される。したがって、彼女が行うことは、彼女に結びついているが、彼女の状況からは切り離されているものに見えるのである (Smith 1990a:92)。

患者を文脈化する全てのことが、見えなくされたか、報告——一つの組織的形式を複製するために観察者の経験を使用し、上で記述されたタイプの構造化する手続きを実行する——にまとめて提示 (package) されたのである。決定がなされる地点に患者が到達した時、彼女は単なる話す存在として、レポートの束の中へ抽象化される。しかしこの効果は、もちろん、テキスト的時間の中では見ることができない。精神医学のワークの対象たちの生きられた経験と、テキスト的現実の秩序の内部で彼女たちの表象を産出する社会的組織化との間の断絶は、不可視にされるのである。

ケース・ヒストリーやケース・レコードは、これらの領域に関わりのある専門家——特に、精神医学とソーシャル・ワーク——の理論化のための主要なデータになる。そこにおいては、ケース・レコードやヒストリーやテキストの典型的な組織化は、自明のこととされている。個人の周りの記述を組織化する典型的な構築は、彼女の生活の局所的な文脈を抹消する。とりわけ、その記述が産出される局所的な文脈を抹消するのである。その中で記録が産出される場所の権力の諸関係、分業、諸場面でのワークの組織化は、不可欠であるが、その形式においては見ることができない。権力の破片は、社会学を含む専門的言説の理論的定式化の中に気づかれずに入り込んでいる可能性があるとしてスミスは指摘するのである (Smith 1990a:93)。

3-4 ヒエラルヒーとイデオロギー的巡回 (ideological circles)

3-4-1 ヒエラルヒーとイデオロギー的巡回

(ヒエラルヒー)という語で、スミスが意味するのは、支配する諸装置や支配する諸関係の組織化における様々な地位に帰属された、政策立案や意思決定の能力の差異化 (differentiation) である (Smith 1990a:93)。ヒエラルヒーは単に、ある特定の組織に内在するのではない。同じ分野の専門家たち間の諸関係は、ヒエラルヒー的に秩序づけられており、行政的、専門的、経営的活動の特定の局所的場は、脱局所的レベルで作用する諸関係とヒエラルヒー的に結びついている。組織の中心レベルでの政策立案や意思決定の過程は、周辺での記述 (accounts) 作成の社会的に組織化されたワークに依存しているのである。

スミスは、このヒエラルヒー構造に支えられたイデオロギー的過程の循環性 (circularity) を、支

配する諸装置や諸関係の特性として指摘する。ここでイデオロギーとは、institutional な過程に不可欠な構成要素である「客観化された知識」を提供するために、専門的学問的言説において体系的に開発されたものの見方である。イデオロギーの実践活動は、部分的には、あらかじめ決定された概念的枠組によって世界を選択的に取り扱う(世界の)記述(accounts)を作り出す方法と同一視される。データの集積を構造化する諸カテゴリーは、あらかじめ決定されたスキーマによってすでに組織化されている。生産されたデータは、そのスキーマによって意図された現実になる。そして、そのスキーマが、データを解釈するのである。その枠組やカテゴリーやスキーマの挿入された関係に合わない論点、質問、経験は、単に、その過程には入れられず、意思決定過程を支配する(governing)テクニクの諸現実の一部にはならないのである(Smith 1990a:94)。

3-4-2 事実報告のイデオロギー的組織化と、ヒエラルヒー

Patricia Groves は、弁護人が依頼人に準備させるためにいかにして依頼人の物語を引き出すか——それらの物語を、それに反対する警察の事例の個々の事項と対峙させることによって——を記述する⁽⁸⁾。法的文脈では、起こったことの警察の記述は「個々の事項(particulars)」として構造化されている。この個々の事項が、生きられたアクチュアリティと犯罪の法的決定を媒介するのである。これらの事項は、目撃者の記述や、何らかの罪で告発された人によってもたらされた記述や、警察による観察や、書かれたもの印刷されたものなどから、その人が告発された「犯罪」のカテゴリーを意図し、そのようなカテゴリーとして読まれうる一連の「アイテム」を構築するために、警察によって使用される手続きの産物である⁽⁹⁾。

「依頼人が[警察の記述の]個々の事項との比較あるいは対立するやり方で物語を語らなければならないということは、依頼人が話すであろうことを——はっきりするやり方でも目立たないやり方でも——構造化する。例えば、彼は、自然に影響された効果として、出来事を個々の事項で描かれている順番で(あるいは、今まさに読んだ個々の事項で描かれていた出来事の順番を思い出しながら)話す」。別のバージョンは、さらに拘束されている。なぜならば、それは、いかにして個々の事項が警察の記録の中でそのように現れえたのかを、説明しなければならないからだ。したがって依頼人は「(個々の事項において描かれるような)一連の現れが、いかにして、犯罪の行為ではない別の一連の行為として生成されるように見えるかを私たちに示す物語を構築する」のである。(Smith 1990a:95)⁽¹⁰⁾

依頼人の物語は、警察による観察や報告の実践活動の産物である個々の事項によって、構造化されている。このようなやり方で媒介された依頼人の物語は、生きられ経験されたものとしての起こったことには、全く対応していないかもしれない。かれらは自分が経験し思い出せるものとしての起こったことに依拠しなければならない。また、警察の個々の事項に応答し、法廷で反撃する何らかの機会を持つような物語を法律家と一緒に構築するためにかれらが用いる他の素材に依拠しなければならない。この複雑な作り話(もちろん、虚偽である必要はない)は、こうしてかれら自身のものとなり、かれらにとって話すべき責任を負うべきものとなるのである(Smith 1990a:95)。

スミスが着目するのは、そのようなイデオロギー的巡回が、理論化し定式化し概念化し政策を作る人々と、組織がその対象と相互関係する実際のやり方を経験する第一線の職員(worker)を分離する組織化の形式に横たわり、そこに住み着いているという点である。

行為の対象である人々と実際に接触する人々は、かれらのワークを支配する政策やカテゴリーや概念を枠づける人々ではない。社会学のインタビューアーは、質問に意味がないことを発見したか

らとって、インタビューのスケジュールを変えたりはしない。福祉の請求を調査しているソーシャル・ワーカーは、請求が通るか否かを支配するカテゴリーや基準を作らない。第一線で働く警官は、犯罪のカテゴリーや基準を決定しない。ヒエラルヒー、権力、支配は、スキーマやデータの循環を維持するのである。事実報告(factual accounts)は、それらのレリバンスを構造化する目的や方針によってコントロールすることができない読みの文脈には、向けられていない。秘密保持のルール、情報の企業所有権、データ保持の企業システムなどは、とりわけテキストの排他的なコントロール——読みや使用の特別な解釈的文脈の範囲の中にテキストを保持しておく——を与えるのである(Smith 1990a:95)⁽¹¹⁾。

イデオロギー的組織化は、支配するスキーマを、所与の局所的、歴史的、経験での出会いから絶縁する。公式の組織の文脈における使用のために認可されたカテゴリー、コーディングの手続き、概念秩序は、レリバンスの組織的(あるいは専門的)構造の言語的方法的特定化である。報告可能な地位を与えられた対象、環境、人々、事態、出来事は、それ自体、事業を実現する日々の組織的実践活動において構築されるのだ。所与の組織(あるいは専門)の押し付けられた言語的資源を形成するカテゴリーや概念的手続きは、組織の記述の中で、「実際に起こったこと／存在するところのもの」に決定的な特徴と順番(order)を割り当てる。専門用語は、暗黙のうちに、組織の特徴——未解明のままにされているが、それらの用語が生み出しうるあらゆる意味の、本質的な資源である——を帯びそれに依存している。ある組織は、記述する専門用語や実践活動に対応する環境や対象を、事実上考案しているかもしれないのである(Smith 1990a:96)。

イデオロギー的組織化は、支配する関係の内部で知られていることとしての世界と、テキスト的現実が「実際に起こったこと／存在するところのもの」として表象する生きられ経験されたアクチュアリティの間に断絶(disjuncture)を創り出す。スミスは、その断絶を、テキスト的現実の社会的組織化の本質的特徴として捉えている。

事実報告は、実際の諸個人によって生きられた／生きられている起こったことや事態についての客観化された知識産出の過程において、形成されたものである。この事実報告の諸要素には、いかにしてその報告が組織化されるのかを構造化する、読みの社会的組織化のための解釈スキーマや、その下でオリジナルの記述が作られ、読まれ(もっと正確に言えば、世界として読まれ)るところの諸カテゴリーが含まれる。支配する諸関係の文脈では、特定の主体のもの見方を征服し置き換える事実性の社会的組織化の奇妙な力は、イデオロギー的組織化の構成要素である(Smith 1990a:97)。イデオロギー的組織化は、支配する組織化を断絶の効果から隔離する弁別的な循環性を持つ。その断絶とは、すなわち、人々が自分の毎日／毎夜の生活において知っている生きられたアクチュアリティと、行政・経営・専門的言説などのテキストの諸現実において行為可能なものとしての世界の表象との間の断絶なのである。

3-4-3 イデオロギー的巡回と、断絶を「修復」する周辺のワーク

公式の組織によって定められた諸カテゴリーは押し付けられる。それらのカテゴリーと、カテゴリーが扱うアクチュアリティが組み立てられるやり方が対応していないときは、組織的ヒエラルヒーと強要する記述可能性の諸システムが、別の専門用語やスキーマの開発を妨げるのだ。スミスはここで、ベトナム戦争でのアメリカ軍の働きについての公式バージョンを批判しながら、イデオロギー的組織化の特徴的な「学」べなさを記述した、Daniel Ellsberg の議論⁽¹²⁾を引き合いに出す。

嘘や自己欺瞞を迂回することの喫緊の必要性は、自分にとっては、一つの「ベトナムの教訓」だった。より広範には——ベトナムは一つの例であるが——合衆国政府が、愚かになり、〈学ば〉なくなるという状況があった。適合的でなくうまくいかない行動を保持し保証するように働く、institutional な「反一学習」のメカニズム同然の事態のありとあらゆるものがあったのだ。短期間での人員の転換、あらゆるレベルにおける institutional な記憶の欠如、歴史の学習をし損ねる、作戦上の経験や失敗の分析のみならず記録までをもし損ねる。失敗についてあらゆるレベルで楽観的な報告をしなければならぬという事実上のプレッシャー、問題や誤りよりも「前進」を記述する、したがって、取り組み方の変更や学習が非常に必要であることは覆い隠されるのである (Smith 1990a:97) (13)。

ここで Ellsberg は、問題を情報やフィードバックの流れの欠陥に帰属している。他方スミスは、このような問題が、イデオロギイ的組織化のヒエラルヒーの内部で生起すること示唆する。そこでは、周辺にあり、組織にとって効果のあるテキストの諸現実への承認から排除される人々のワークの (working) 経験は、効果的に抑圧されるのである。

関連してスミスは、Jonathan Schell による描写的記述 (descriptive accounts) の考察を取り上げる (13)。アメリカ軍が戦っている世界、職員が報告しなければならない世界は (かれらが記述可能にし続けている活動の結果からすれば)、それを記述可能にするためにかれらが使わなければならないなかったカテゴリーとは対応していなかった。報告のために押し付けられたカテゴリーと経験の断絶は、戦いを報告する実際のワークを行っている人々によって周辺から修復された。第一線の兵士は、自分の行なったことが、それを報告する時に使わなければならない用語で記述されうるようにするやり方を見つけなければならなかった。その際に使用される方法は多様であり、多くの場合、創意工夫に富んでいた。

(爆撃損害評価報告において使用されるほとんどの用語は、大きな、はっきり見える、固定された軍事基地への爆破攻撃のようなもののために考案されてきたようだ。(FAC のパイロットが実際にガイドした) 野原や村やジャングルのような場面におけるゲリラへの爆撃のためではなく)。彼の実際の任務にほとんど関係のない一連の指示の援助によって空爆をガイドしなければならない自分を発見したとき、個々の FAC パイロットは、どこで敵が軍事行動をしているかを話そうとする自分自身のやり方を即興で作り出さなければならなかった。これが、Captain Reese が、自分は跡を追って、敵の軍勢が移動したことによって新しくへこんだ草を突き止められると思うようになり、3列になっているかどうかで敵の家と民間人の家を区別できると思うようになったやり方であり、Lieutenant Moore が、自分は歩き方で兵士から農民を見分けられると思うようになったやり方であり、Major Billings が、野原を低空飛行して、反撃するために走ってくる人を見ることによって、民間人から敵の兵士を見分けられると信じるようになり、森に漂う一筋の煙をモンタニヤール人 (ベトナム南部の高地に住む山人) の火から上がってきたものか、ベトナム兵士の火か判断できると信じるようになったやり方だ (Smith 1990a:98) (15)。

このワークは、あらゆる書かれた記述や記録用紙 (tally sheet) の作成以前に第一線でなされているが、そういったテキストに向けられているのである。第一線の人々は、軍の報告の認可され押し付けられた用語と自分たちのアクチュアリティの断絶を乗り越えるような、世界を知り世界の中で行為する実践活動を発展させる。彼らは、上層部がそうでなければならないと言う世界を、そのようなものとして再生産する。これは正確性の問題でも、いかに「進捗状況」が誇張されているかの問題でも、コミュニケーションの問題でもない、とスミスは捉える。

先の引用にある最前線の兵士たちの驚くべき創意工夫は、カテゴリーと世界の断絶を修復する。

そのことによって、カテゴリーに埋め込まれた政策やスキーマの適切さが、受理された情報を理解可能にするそれらカテゴリーの能力において、上層部で繰り返し承認されるようになるのである。カテゴリーが依拠する「アクチュアリティ」は、記述する手続きの実施によって、実際の軍事行動として〈産出された〉ものである。イデオロギー的組織化の循環性は、軍で作動するテキスト的諸現実を、底辺で経験されたアクチュアリティと切り離す。「このギャップに気づくために、私たちは、ベトナム人の立ち位置からこの戦争の記述を読む必要はない。この戦争で戦わなければならなかったアメリカ人兵士の経験やそれに基づく記述は、受理された情報は底辺レベルでは理解できないことを明白に示している」とスミスは指摘するのである (Smith 1990a:99)。

この種のヒエラルヒー的構造は、もちろん、マックス・ウェーバー以来の官僚制の社会学的分析ではおなじみである。しかしながら、あまり開発されていないのは、専門家たちの間の諸関係を、専門的組織に組み入れられているが、特定の企業の組織形態に帰することはできない、ヒエラルヒーとして研究することだとスミスは主張する (Smith 1990a:99)。大学や病院や研究機関などの位置構造やそれらの相対的地位に基づく、表向きには等しく権力を持つ専門的言説の諸関係内部での内的ヒエラルヒーも存在する。しかしここでスミスが着目するのは、専門的組織の複数の場で再生産される、専門家たちの間の諸関係の社会的組織化である。それは例えば、看護師と医者、ソーシャル・ワーカーと精神科医などの関係性だ。これらの諸関係において典型的な上下関係は、歴史的に確立されたジェンダーの関係性を繰り返し、維持してきたものでもある。

3-4-4 専門家たちのヒエラルヒー構造とジェンダー

女性たちはこれまで、institutional な過程における専門家たちのヒエラルヒー構造の下位で仕事をしてきた。公的なテキストに媒介された言説における権威ある話し手に女性が入ってこなかったことは、このようなヒエラルヒー構造とも関係している。たとえば、患者を入院に導いた出来事に関係する状況や人々へのあらゆる種類の直接的接近を行う、精神医療のケース・レコード作成の唯一の権限を与えられた貢献者は、ソーシャル・ワーカーだ。患者自身、その友達、家族、同僚は、「報告された」話においてのみ現れる。同様に、看護師もケース・レコード作成の唯一の権限を与えられた貢献者だ。彼女たちは、直接、患者の病棟での経験の一部になるのだ。これらの専門家たちは、精神医学に従属している。彼女たちの報告の諸様式は、技術的に開発されている。どのように報告を作成するか、どのように病棟ノートをつけるのかを学ぶことは、専門家になるための訓練の一部だ。報告の様式は、何が精神科医の決定を可能にするのかによって決定されるのである (Smith 1990a:99)。

報告するため、精神医療の意思決定過程の基礎となるテキスト的諸現実には何が組み入れられるかを厳しく制限するために使用されるカテゴリーや概念には、精神医療の言説やこれに従属するソーシャル・ワークや精神医療の看護の言説のコントロール・スキーマが組み込まれている (Smith 1990a:100)。ある女性の、家ででの、仕事での、病棟での実際の生活の全体から、特定の選別がなされ、あるルールや慣習に従って組み立てられ、言説的スキーマを表現するカテゴリーや概念が展開する。これまで見てきたように、ケース・レコードを構築する手続きは患者の周囲の出来事を組織化し、彼女の行為や言明を「兆候」として産出し、出来事や行為や言明が生じた文脈を無視し、報告書の作成における構成要素として報告される観察や他のワークを隠蔽するのである。

人々の生活の局所的アクチュアリティと精神医療の決定過程をつなげる中で、そのような記すことの実践活動は、それらを通して認められうるもののみをテキスト的现实として産出する。精神医

療の場面の外の患者の事情を知ることは、ソーシャル・ワーカーの仕事だ。彼女は患者の家族を訪ねたり、かれらと話したりしたかもしれない。彼女自身が患者の問題——金や仕事や配偶者や子供の有無などなどの問題——について情報を提供したかもしれない。彼女が学ぶことは、精神科医への報告書にされる。これらの報告書は、精神医療に付随する職業の専門的に認可された概念やカテゴリーによって構造化される。日常生活場面において起こることのうち報告の規定の枠組に合わないもの全て——ソーシャル・ワーカー(あるいは看護師)はこれに接近したのだが——は、言われないうまにされる。組織的には、それを言うやり方はないのである(Smith 1990a:100)。

専門的役割の外に踏み出すこと、専門的分業によって確立された循環的枠組にすでに合わない言語を使用することは、せいぜい言われたことが権限を欠いた不確かな場所に置かれることを確かにするだけだとスミスは言う。もしそれが適切な専門用語に変えられなければ、それはシステムの中で流通できないのだ。この閉鎖は、患者の進行中の生きられた状況に直接接近する人々の従属的地位によって強化される。彼女らには、その中で患者に何が起きているのかが議論されるのである。専門用語を再定義する権利は与えられていないのである。

決定要素としての支配する諸関係の存在は、もちろん、テキストの表面——そこから、テキストの現実を完成させ完了する読みの社会的組織化において、一つの「実際に起こったこと／存在するところのもの」が読み上げられるのであるが——からは消えている。そして人々の生活のアクチュアリティと、官僚制的、専門的に行為可能な世界を作るテキスト的諸現実組織化のために突きつけられるカテゴリーや概念の間にギャップと断絶が現れてくるところでは、それらのアクチュアリティと直接接触する人々は、アクチュアリティを記述可能にする押し付けられ押し付けられうるカテゴリーの意味を再生産するために熱心に仕事することになるのである(Smith 1990a:104)。

4 テキスト的諸現実における“性暴力”の記述可能性(accountability)の問題

以上見てきたように、人々の経験は、何らのやり方で記述されることによって初めて社会的に報告可能になる。起こったことが何であるかということは、それがどのように記述可能・報告可能であるかに依存している。何が起きているかということは、何が起きているかをいかにして記述できるかということと、不可分に結びついている。人々の日常生活の経験で起こったことが、教育や医療や行政や経営や法や知識などに関わる諸組織や機関や施設で取り扱い可能な社会現象になるためには、公的な文書において報告可能な「客観化された事実」として記述し直される必要がある。いわゆる専門家のワークには、諸専門機関を一定のやり方で機能させるためのものの見方や語彙やカテゴリーを用いて、自他の日常生活の経験で起こったことを、諸機関の内部で理解可能で報告可能な様式に記述し直すやり方に習熟することが含まれている。

以下では、学校(すぎむら(2014))と刑事司法(牧野(2013))をめぐる二つの社会学的研究をドロシー・スミスの社会学の観点から検討する⁽¹⁶⁾。これらの研究は、“性暴力”をめぐる経験が、institutional な過程に接続され公的に取り組むべき社会的な問題として組織化されるか否かの境界で何が起きているのかを、最前線での過程に関わる人々によって行われる「記述するワーク(accounting work)」の詳細から明らかにしたものとして捉えられる。

4-1 “性暴力”の不可視化と組織的ヒエラルヒー

すぎむら(2014)では、学校において、生徒の経験が“性暴力”として記述可能・報告可能になるこ

との難しさが、学校組織における養護教諭の教員としての地位の「低さ」との関連で考察されている。

管理職の学校のワーク、担任の教室のワーク、養護教諭の保健室のワークがどのように配置されていくかは、生徒の経験がどのように記述可能・報告可能になるかと結びついている。たとえ、養護教諭が保健室から生徒の経験を性暴力として問題提起しようとしても、そもそも教員の間で「性」について語ることに對するタブーがある。「性」の問題を他の教員に相談しようとしても、しばしば、「うちの学校にはない」「親がそんなことする訳がない」と一蹴され、そもそも「性」をめぐる出来事が起こったという「事実報告」の組織化自体が行われない。

あるいは、生徒に性行為の「同意」があったとされる場合は、「暴力」として記述されることが難しい。生徒本人の「被害感情」がない場合もある。この場合、起こった出来事は「恋愛」「和姦」というカテゴリーや、そうしたカテゴリーに含まれる解釈スキーマを使って「テキスト的現実」へと組織化されていく。そこにおいては、人間関係の力関係において強いられる可能性があることや、そのような力関係の中で「同意しない」という選択肢があったのかという疑念は組み入れられない。そればかりか、起こった出来事が、「不純異性交遊」「深夜徘徊」など、従来の「生徒指導」の文脈におけるカテゴリーやスキーマを通して組織化されることにより、暴力を受けた生徒が「ケア」ではなく「指導」を受ける可能性さえあるのである。

養護教諭は、教室では見出せない生徒の問題を把握する最前線にいるが、学校教育という組織の中で「周辺」に位置するため、発言権が弱い。養護教諭が直面する生徒の困難と、学校組織で流通してきた従来の「性」をめぐる「テキスト的現実」の間には、断絶がある。公式の組織によって定められたカテゴリーやスキーマと、それらが扱うアクチュアリティが組み立てられるやり方が対応していないのである。スミスが言うように、ここではまさに、組織的ヒエラルヒーと強要する記述可能性のシステムが、別の専門用語やスキーマの開発を妨げている。学校組織の中で「周辺」に位置する養護教諭は、「性暴力」という新たなものの見方を含むカテゴリーを導入する権限を、組織上持たないのである。

4-3 「性欲」による「暴力」としての「性犯罪」の社会的組織化

牧野(2013)では、刑事司法における「供述調書」を作成するワークの詳細が考察されている。「供述調書」は、刑事司法の一連の *institutional* な過程で常に参照される「事実報告」としての公的な文書である。「性犯罪」に関わるこの文書の作成において、起こったことは、「性欲」を動機とする「暴力」として記述されていく。「性犯罪」の原因は、「男性」誰もが持つ「本能」としての押さえられない「性欲」と捉えられており、それを「発露」させる、「被害者」である「女性」の「落ち度」が常にセットで問われることになっている。

起こったことが実際はどうだったかに関わらず、そのような報告様式において動機が記述されない限り、「供述調書」に対する上司の「決裁」は受けられず、後続する諸機関が作動できない。*institutional* な過程に関わる人々のワークを配置させる、公的な文書の力が示唆される。

牧野(2013)では、刑事司法で報告可能にされる『「性欲」による「暴力」としての「性犯罪」』という記述様式においては、実際に起こったこと、とりわけ「加害者」がなぜ「強姦」という暴力に及んだかということが、かえって不可視にされてしまうのではないかと問題提起される。また、こうした「供述調書」における「性欲」の記述の様式は、「性犯罪者処遇プログラム」という「加害者」の再犯防止対策における「性欲」の記述の仕方——「性欲はコントロールできる」——と齟齬がある。刑事司法の一連の *institutional* な過程において行われるワークと、このプログラムで行われるワークが接続する

ことの困難が示唆されるのである。

「供述調書」に書かれる出来事に関わった人々と直接に接触する警察官は、「調書」作成のワークを支配するカテゴリーや概念やスキーマを決定したり変更する権限を持たない。仮に、人々が話すこととしての生きられたアクチュアリティが、「『性欲』による『暴力』としての『性犯罪』」という記述様式に対応していないことを発見したとしても、なんとかやりくりをしてその断絶を「修復」しようとする。それは、後続する諸機関のワークを滞りなく作動させるために必要なこととして、日常的に求められることでもある。結果としてかれらは、上層部がそうでなければならないと言う世界をそのようなものとして再生産していくことになる。ここにスミスの言う、支配する諸関係におけるヒエラルヒー構造や、そうした構造におけるイデオロギー的組織化の循環性が引き起こす、一つの困難を見出すことができるのである。

4-4 “性暴力”の記述可能性の境界

両研究では、学校・警察・司法という institutional な場面における、“性暴力”の記述可能性と報告可能性の境界をめぐる問題提起がなされている。人々の日常生活の経験で起こったことは、そもそも“性暴力”として institutional な過程に接続できるのか。あるいは、仮に接続できたとしても、実際に起こったことが institutional な場面のものの見方や語彙やカテゴリーにそって取捨選択される過程で、むしろ“性暴力”という暴力の特徴が理解不可能にされてしまっているのではないかと、問われているのである。

このことは、単に、“性暴力”という新しい言葉を導入すれば済むということではない。その概念が学校や警察や司法の実際の意思決定の過程で作動するためには、これら諸機関において日々行われている局所的でルーティン化された人々のワークとその配置のされ方それ自体——そこには、従来のワークを支えてきた、概念枠組や、意思決定のヒエラルヒー構造が埋め込まれている——を変える必要がある。諸機関で行われる人々のワークは、公的な文書としての「事実報告」を媒介にして、どのように連鎖し配置されていくのか。そもそも、どのような論点、問い、経験が「テキスト的現実」の一部として組み込まれるのか。その過程で何が起きているのか。これらのことは、通常不可視にされている。両研究は、局所的なアクチュアリティが脱局所的な「客観化された知識」に転換されるワークの最前線で何が起きているのかを、当該ワークに習熟している人々が内側から解明した試みとして、Institutional Ethnography の観点から捉え直すことができるのである。

5 おわりに

以上、ドロシー・スミスの社会学に依拠しながら、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係はいかにして関わり合うのかを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直す社会学的探究のあり方を考察してきた。institutional な過程におけるテキスト的諸現実の社会的組織化に着目しながら、人々の生活の毎日毎夜の局所的アクチュアリティが、その外に拡張し、その内部では発見できない社会関係によって組織され決定されるメカニズム検討してきたのである。

自分が直接観察し経験しながら知られることを超えた「社会」について知ろうとする時、私たちはテキスト的諸現実の依拠してそれを行う。テキストに媒介された客観された言説的な知識は、いま・ここを超えた世界についての首尾一貫した現実を提供してくれる。私たちはこれらのテキスト的諸現実を、自分が実際に見たり聞いたり経験したりしたことを表象・代表するものとして捉えて

いる。テキストは私たちの毎日毎夜の生活に入り込み、私たちの行為を時間や場所を横断した人々の行為と接続し一定のやり方で配置していくのである。私たちは、テキストを媒介にして、日常のお決まりのルーティンを遂行する中で、自分の生活や経験を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する拡張された社会関係に自覚的・無自覚的に参加していくのである。

本稿で論じてきたのは、このようなテキスト的現実の社会的組織化を解明する際の着眼点である。直接経験する世界がどのように組織化されているかということは、実際に自分が経験している生活や活動の範囲の内部からは部分的にしか見ることができない。日々の生活での限定された条件と限定された状況における人々の経験が、institutional な過程と接触し、この過程において扱われる標準化された形式に転換され一連の行為に入っていく時何が起きているのかは通常不可視にされている。スミスが問うているのは、テキスト的諸現実がアクチュアリティを正しく表象しているか否かという問題ではない。むしろ、客観化された知識という知ることの形式は、時間や場所を横断した一般的な社会関係の成立にとって、不可欠で本質的な特徴として捉えられている。スミスの社会学において、日常生活世界とは、常にこの一般化された社会関係との関わりで組織化されるものとして捉えられているのである。

ここで問われているのは、日常生活世界と一般化された社会関係のこのような関わりが、通常不可視にされていることである。日常生活世界が、知らぬ間に一般化し一般化される諸関係において決定されてしまい、自分の経験の成り立ちが不透明になってしまう時に生じる困難がある。スミスの指摘する、支配する諸関係におけるヒエラルヒー構造や、そうした構造におけるイデオロギー的組織化の循環性は、人々の生きられた経験とテキスト的現実の断絶を覆い隠す。テキスト的現実の社会的組織化において除外されたことは、とるに足らない無関係なこととして、そもそも起こったこと自体不可視にされる。人々の生活のアクチュアリティと、官僚的・専門的に行為可能な世界を作るために押し付けられたカテゴリーや概念の間の断絶を修復しようとする「努力」によって、起こったことの別の可能性は、概念的に封じ込められる。別の次元の現実がありうることは、想定不可能にされるのである。

本稿で考察してきたのは、このようなテキスト的諸現実の社会的組織化それ自体を解明する社会的探究である。ここでは、諸機関で行われる人々のワークは公的な文書としての「事実報告」を媒介にしてどのように連鎖し配置されていくのか、そもそもどのような論点や問いや経験がテキスト的現実の一部として組み込まれるのか、テキストを書いたり読んだりする過程でいかなる概念実践が行われているのか、などが論点になる。自分の生活や経験を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する拡張された社会関係の成り立ちを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直すドロシー・スミスの Institutional Ethnography は、直接観察し経験しながら知られることを超えた「社会」について知るための、もう一つ別のやり方を示唆するものとして捉えられるのである。

【注】

- (1) **actuality**: スミスはこの語に中味を与えないのだと言う。なぜならば、この語には、その中で人々が生き、その中でテキストが読まれているところのテキストの外部を常に指示してほしいからだと言う。アクチュアル(actual)やアクチュアリティ(actuality)という概念は、探究されるべき世界——それは彼女あるいは彼が探究の仕事を行うところの世界と同じ世界——が既存の社会的言説のテキストの外部にあることを指し示す。アクチュアリティは、常に、

- 記述されうる、名づけられうる、分類されうるもの以上のものである (Smith 2005:223)。
- (2) ワーク：スミスは work という語の意味を拡張して使用している。ワークという用語は、一般的には、人々が賃金を得て行うこと(賃労働)を指してきた。The Wages for Housework group (「家事労働に賃金を」グループ)は、この概念を家事(housework)だけでなく、時間や努力や意思を必要とする人々の行い全てを指すように拡大した。スミスの社会学はこの拡大されたワーク概念を、人々が何らかのやり方で制度的過程に参加している際に実際に行っていることを探究するために採用するのだと言う (Smith 2005:229)。この点については、上谷(2017b)も参照。
 - (3) 以上をふまえて、本稿では institution を英語表記のまま使用する。
 - (4) 元は、Smith(1974)“The Social Construction of Documentary Reality”, *Sociological Inquiry*, vol.44, pp.257-68. として発表された。
 - (5) case history: 医学だけでなく、case studies (case work を含む)をするための基礎資料(家族歴 / 集団歴)である。病的だけでなく、個人歴すべてを指す。医学用語としては「病歴」となっているが、病気のことだけが書いているわけではないと考える。
 - (6) 元は、Canadian Mental Health Association, The Women and Mental Health Committee(1987) *Women and Mental Health in Canada : Strategies for Change*. Toronto : Canadian Mental Health Association, pp.59-60. からの引用
 - (7) Ibid. ケン・ローチ監督の2017年の映画「わたしは、ダニエル・ブレイク(原題 I, Daniel Blake)」では、病気で働けなくなり支援手当を申請した主人公ダニエル・ブレイクが、まさにここでスミスが言う、福祉をめぐる諸機関における文書作成と意思決定のヒエラルヒー的分業に翻弄される姿が描かれている。この点については改めて論じる。
 - (8) Patricia Groves (1973)“Lawyer-Client Interviews and the Social Organization of Preparation for Court in Criminal and Divorce Cases”, Ph.D.Diss., Department of Sociology and Anthropology, University of British Columbia, Vancouver.
 - (9) この点については、George W. Smith (1988) “Policing the Gay Community : An Inquiry into Textually-mediated Social Relations”, *International Journal of the Sociology of Law*, 16, pp.163-83. も参照。
 - (10) 鍵括弧内は、Groves (1973:152-154)からの引用。
 - (11) 他方、スミスは、「私たちは1960年代以来、組織によってコントロールされない解釈実践にさらされた時、いかにして組織的記録が極めて異なったやり方で読まれうるかを見てきた」とも指摘する (Smith 1990a:96)。当時起こった、大学の学長室での座り込みでは、例えば、大学がスラムの土地所有者であり、圧政的な体制の支持者であることなどを示唆するファイルをもたらした。所与の法的な読みやコントロールされた解釈スキーマの外、あるいはそれらによってコントロールされない文脈で読まれるテキストがあり得るのだ。別の文脈で読まれるテキストは、従来の組織的に産出された仮想現実に対する、その外にいてそれに抑圧されている人々の声によってなされた挑戦になりうると示唆されるのである。
 - (12) Daniel Ellsberg (1972) *Papers on the War*. New York: Simon and Schuster.
 - (13) 元は、Ellsberg (1972:18)からの引用。スティーブン・スピルバーグ監督の2017年の映画「ペンタゴン・ペーパーズ(原題 The Post)」では、ベトナム戦争をめぐるテキストの諸現実を再編成するという挑戦が、テキスト的現実を産出する専門家たちのヒエラルヒー構造のトップで女性が意思決定するという挑戦とともに描かれている。

- (14) Jonathan Schell(1966) *The Village of Ben Suc*, New York : Vintage. および Schell (1968) *The Military Half: An Account of the Destruction of Quang Ngai and Quang Tin*, New York : Vintage.
- (15) 元は、Schell(1968:181)からの引用。
- (16) この章の以下の論述は、2017年6月4日に開催された第65回関東社会学会大会(於：日本大学)テーマ部会B「性的身体の現代的諸相—制度的場面における“性暴力”の操作・管理・運用」における、発表原稿を加筆修正したものである。

【文献】

牧野雅子(2013)『刑事司法とジェンダー』インパクト出版

Dorothy E. Smith(1987) *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*, University of Toronto Press.

— — — (1990a) *The Conceptual Practices of Power: A Feminist Sociology of Knowledge*, Northeastern University Press.

— — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity: Exploring the Relations of Ruling*, Routledge.

— — — (1999) *Writing the Social: Critique, Theory and Investigations*, University of Toronto Press.

— — — (2005) *Institutional Ethnography: A Sociology for People*, Altamira Press.

Dorothy E. Smith & Susan M. Turner(eds.) (2014) *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*, University of Toronto Press.

すぎむらなおみ(2014)『養護教諭の社会学——学校文化・ジェンダー・同化』名古屋大学出版会

上谷香陽(2017a)「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点」文教大学国際学部紀要 27(2)、pp.1-16. 文教学部国際学部。

— — — (2017b)「日常生活世界の記述可能性——ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点」文教大学国際学部紀要 28(1)、pp.1-22. 文教学部国際学部。

— — — (2018a)「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード——ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって」文教大学国際学部紀要 28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部。